

環境保全とガンジー主義における完全なる人生

R・P・ミシユラ

山本修一訳

人類に希望はあるのか？ あらゆる物事に敏感で洞察力のある人々の間で、これは最も緊急な問題になっている。それは世界の終末の予感と恐れのみならず、破局を回避し、健全な道を選ぶという選択を人類がしなければならぬということが明確にあるからだ。現在、人類は転換期に立たされているが、引き返しのできない時点にきているというわけではない。選択する権利は、人類にある。

いわゆる開発途上国では、将来に希望のない生活が続いているが、これは第二次世界大戦以降に始まったこと

ではなく、現代文明が始まって以来のことである。その半面先進国は、世界が今まで経験したことがない偉大な文明の栄光のもとに存続してきた。科学と技術、産業化による経済成長、そして人間を動く機械に変えてしまう社会学、この現代文明も現在では未来のないものになってしまった。近年になって、我々が望みを託してきた高度成長を維持するには資源が不十分であること、またたとえ資源があつたとしても経済発展には思いもよらぬ副作用が隠されていることに気がついた。積もり積もつたその影響は、恩恵よりもはるかに心身共に有害なもの

である。

現代文明の病患は、物質面の向上や高収入、よりよい食生活、医学の驚異的發展、応用物理や化学の偉業など人間精神を満足させることを目的とした文明の無力さを反映していると、ヘイルブローナーは、その著書『人類の未来への一考察』で述べている。また、彼はさらに「……産業文明の価値は、二世紀の間、我々に目的と突貫精神を与えてきたが、今になってその自明の正当性を失ったようだ」、また、「発展という万能薬に懐疑的であった者たちは、曾祖父や祖父よりも三倍も五倍も十倍も十倍も裕福である現代人が、なぜ三倍も五倍も十倍も幸福や満足を得られないのか、また人間として成長しているとは限らないのか、不思議に思ってきた。以前は、少数の哲学的な批評家の特権であったこのような懐疑主義は、現在多くの人々の意識の中にある」と述べている。

進歩主義者は未だに科学技術という新しい神に期待をもっている。高度成長が続くと思っており、現在のエネルギーや環境や非人間化などの危機は、一次的な逸脱であると云っている。終末論者はのしかかる破滅がすぐそ

こまで来ており、逆戻りする以外人類を救うことはできないと信じている。しかしながら、ブッダのマディア・マルガ、即ち中道の信奉者は、人類の進歩はその利害特質すべてをひっくり返して、新たな方向を見いだすべく、新たな機会へと転換されるべきであるし、また新しい未来の文明として失われた人類の精神を取り戻すことができると考えている。

本論では、ガンジーが考えていた道、即ち人類が人間精神を取り戻し、自分自身がつくり出した病患から脱皮するために人間が取るべき道について論じたいと思う。私はこれをマディア・マルガと呼んでいる。ガンジー主義者の中には、一九四八年のガンジーの死によってその思想の発展は終わったと感じているものもいるが、ガンジーは決して人類に過去に戻れとはいわなかった。彼は過ぎ去ったからといって過去を否定しないこと、ただ単に現在だからといって現在を受け入れないこと、そして個々の人間の尊厳を保証せず、また微小なバクテリアから最も知的な人間までの生命の調和を認識しない未来には依存するなど言った。

ガンジーにとって、生命は統合された形で機能している。人間は個々に独立して生存できない。それぞれの動きや行動は、人間の全体的な生命のシステムに関連している。人間の頭脳はコンピュータのようだが、人間の頭脳に匹敵するコンピュータはない」とバベルト・ドレーファスは、その著書、『コンピュータにできないこと——人工知能の限界』で述べている。我々は現在機械化からコンピュータ化へと移行している。生命の細部は見る事ができるが、全体を見ることはできない。全体をつくり上げている細部の関連性や全体像を見ることはできない。

ガンジーと環境

ガンジーは、生命とそれを支える生態系という全体観に立ち環境を論じた。彼は環境問題の根源に行き、そこから現代文明の根源へと辿っていった。彼はさらに現代文明の根底にあるのは、神に創られた「人間の運命」という西洋の視点であり、この考え方は精神より物質を、精神性より科学を優先するといった誤った考え方にある

ところへと到達した。

事実、環境問題は極めて深刻になっている。オゾン層の破壊、温室効果、気候変動、貧困と飢餓、人口増加と都市化等々の問題群は日常的という域を脱し、地球上の生命の存続そのものと深くかかわっている。しかし、これらの問題については、既に多くの人が書かれ、語られているので、ここで再度説明する必要はないだろう。

ガンジーは環境問題を他から切り離すことはせず、その原因は現代文明にあると考えていた。かつて、ある人が彼に「あなたは現代文明をどう考えるか？」と質問をした。それに対して、彼は「良い考えではある」と答えたながらも、「真の現代文明の基礎はまだつくられていない。現代文明の真の意味は、欲望の増加にあるのではなく、欲望の熟考や自主的な自制にある。そこにしか真の幸福と満足をもたらすものはなく、しかもそれは献身的な行動を促すものである」ことを示した。さらに付け加えるとすれば、良い環境と持続可能な未来をつくる道はこのほかにはない、ということだろう。

よく引用されるガンジーの言葉で、「地球は皆の要求

を満たすには十分であるが、皆の食欲を満たすには十分である」と言うのがあるが、この言葉の中に彼の環境および生態系に対する考え方が表われている。そして彼の考え方を追っていくと必然的な結論として、二つの明確なメッセージが浮かび上がってくる。まず第一に、食欲と食欲を増長させる技術は、自然と環境に破壊的な影響を与えるということである。現代文明は自然を単なる物質として扱う。したがって、もはや自然は生命を創造し、支えるシステムではなくなってしまう。人間さえも一つ的手段に過ぎず、経済成長と物質的幸福が目的一样になっている。

したがって、環境問題を理解し、解決するためには、今の文明の目標と矛盾するものをまず見直す必要がある。現代文明から生じた環境問題を、その発端とも言うべき技術で解決しようとすることは無意味であり、その結果にはあまり期待できない。

次に環境問題を解決していくに当たり、我々はこれらの問題は実はさらに深い病患の一部であり、一つの現象に過ぎないことを認識すべきである。その病患は、文明

それ自体の病を意味している。ゆえにいわゆる環境に優しい技術を開発するのによいが、このようなアプローチは時間稼ぎに過ぎず、毒を一つの場所から他の場所に移動することによって、さらに状況を悪化させるだけである。また、表面的には問題が解決したかのように見せかけながら、実はさらに崩壊へと導いているという事実を忘れてはならないと、ガンジーは我々に警告している。

ガンジーは欲望を自制することを強く訴えた。これは現代における経済原理と相反するアンチテーゼである。彼は発展とは、万民の基本的な物質的要求を満たしながらも同時に人類の文化の基盤を作り上げていく一つの過程である、と再定義した。ここで言う基盤は精神的、倫理的かつ道徳的なものにほかならない。しかし、ガンジーの精神性を宗教と混同してはいけない。彼の親友の中には事実、無神論者もいたからだ。

したがって、ガンジーにとって発展とは、それが経済的あるいは技術的なものであれ、精神の向上をもたらすものに限られたのである。あるとき、彼は「パンは貧しい者にとっては神である」と言った。すべての人々の基本

的なニーズを満たすことは必要であるが、そのニーズとどの程度のものかというのは、時代と人類の存続と開発を損なうことなく資源を供給できる地球の容量によるだろう。

ガンジー的解決策

ガンジーは環境問題を深く分析し、その原因は現代文明にあると主張した。それだけでなく、我々が注目すべき具体的な解決策まで提出している。しかし、ガンジーは単に人類の運命の予言者ではない。このことをここで明らかにしたい。彼は人類の人間性を確信していた。人間は、紛争や戦争、また食欲や収奪によるのではなく、愛と献身、他の人々あるいは生物に対する思いやりによって一層特徴づけられる存在であることを、深く信じていた。人間がそういう存在でなければ、現在の地球上に人類は存在していないだろう、とも彼は言っている。したがって、均衡は常に善の方に傾いていたのだ。したがってこれまでもそうであったように、人間の本然的な善は、究極的には勝っていくだろう。

さて、ここで自己利益という動機の唱導者、アダム・スミスが『道徳情操論』に述べている話を思いだしてみるのが面白いだろう。この内容は、我々が投げ掛けているのと良く似た質問に対する答えであるが、アダム・スミスの答えは後世の彼の追隨者のそれとはずいぶん違っている。

ヨーロッパにおける「ひとりの人道主義者」が、中国（大清帝国）で何百万人もの人々を飲み込むような恐ろしい地震が起こったことを聞いたとき、その人はどのようににされるでしょうか、とスミスに聞いたと仮定する。スミスは熟考して、彼は「まずもってあの不幸な民族の災厄に対してきわめて強く自己の悲しみをあらわし、人生の有為転変、ならびにこのように一瞬にして荒廃に帰しうるようなあらゆる人間労働の虚栄に対しておそれる種々の憂鬱な省察を加えたことであろう。もしも彼が思索家であったとすれば、彼はまたおそらく、こうした悲惨事がヨーロッパの商業取引ないし世界全体の貿易や事業の上にもたらすおそれのある影響に関する色々の考え

方を子細に調べてみたかも知れない。”と言う。やがて、入念な思考が終わって、“その人道主義者”は、遠い中国で起こった危機について心配するだろうか？ 彼はそうしないだろう。彼は“何事もなかったかのように、再び前と同じような気安さと落ち着きをもって自分の仕事に従事したり、あるいは自分の娯楽をつづけたり、休息したり、あるいは気晴らしをしたりするであろう。”と、スミスは語る。

しかし、いま仮りに、明日自分の小指が失われる運命にあると、彼が告げられたとした場合、極めて異なった反応が、この“小さな災”を考慮することで起こるだろう。人道主義者は苦悩に陥り、心配と恐れで一晩中眠れないだろう。ところが、“何百万人という自分の同胞が破滅の淵に望んでいても、もし彼がそれらの人々を決してみなければ、彼らの破滅に対して最大の深い憂慮はするもの、彼はおそらく最大の安全感を抱いたままで高野をかくであろう。”と、スミスは言う。

さらにスミスはきわどい質問をする。もし彼の指の大部分が相当傷つき、中国の破滅が相当小さいとき、この

ことは、選択の権利を有する人道主義者は彼の小さな指を救うために何百万もの中国人の絶滅を選ぶ、ということとを意味するだろうか？ スミスは明確に、“人間の本性はそのような思想に対して驚いて肝をつぶすであろう”と答える。“そして世間はたとえこの上もなく甚だしく腐敗堕落していようと、そのような思想を抱くことのできる悪漢をいまだかつて一人として生み出したことはない”と強調する。

しかし、我々のすべてはこういった利己心の創造者であるから、いったい何が我々の手を止めるのか？ スミス自身も利己心の衝動を愛護する、まさにその使徒ではないのか？ 一体何が、我々自身の目の前の幸福を得る権利を越えて人間の本性の権利を優先させるべく動かすのだろうか。それは、“醜悪性”をもった我々すべてに存在する内なる存在者、またその言葉を告げる内なる良心の創造者こそ、人間の本性に対して従順にさせる。それこそ、“あらゆる尊敬すべきもの、高貴なるもの”に対する愛情であり、われわれ自身の性格のもつ雄大、威厳ないし優秀性に対する愛情である”と、スミスは答える。

(訳者注、引用部分は、アダム・スミスの『道徳情探論(上)、下』米林富男訳、未来社、一九六九年、を参考にした。)

アダム・スミスがその時代の偉大な知性として言わねばならなかったことと全く同じことをガンジーもまた言っているが、それはもちろん彼自身の言葉とスタイルで語られている。ガンジーを今世紀最大といつてよい偉人とならしめたのは、言行一致であった点である。ガンジーは、アダム・スミスが、そして後年、二十世紀最大の科学者、アインシュタインが言わねばならなかったことの価値を身をもって示した。

ガンジー主義経済とは、生態的に持続可能な生産過程を達成する手段である。すなわち、すべての人々の最低限のニーズを満たす手段であり、社会だけでなく個人の文化的発展を推進する手段である。その目的は人格陶冶である。この目的を達成すべく、達成手段を選択しなければならぬ。ゆえに、ガンジー主義経済には次の三つの柱をおいている。

1 必需品の最小限化

2 生産機構の分散化
3 自給自足

第一の点は、必需品をすべての人間が最低限のニーズを満たせる程度のレベルに抑えることによって、廃棄物を削減し無くしていくと共に、貧しい人々の物質的生活レベルを向上させることである。このような動きは必然的に、一部の人々の食欲を満たすためではなく、すべての人々のニーズを満たすためにのみ天然資源を利用できるような技術の発展を促すだろう。

このことは当然、人口増加にも関わりがある。したがって、ガンジーは必需品の制限だけでなく、人口増加を家族レベルで補完していく程度に抑えることによって増加をも抑制できる、と堅く信じたのである。これを達成する手段は貧困の撲滅、教育、地域レベルの総合的計画、そして自己制御である。

次に彼が提唱したのは生産機構の分散である。すなわち生産は大衆によって、しかも住んでいるところで行うべきであるということである。このようにして地域の安定という概念を与えている。ガンジーを批判する人々

は、彼が言ったことも書いたこともないことを無理矢理、彼の仕業にしようとしている。ガンジーは機械に、都市に、産業に反対していたとしばしば言われる。そのような側面もあるかも知れないが、ガンジーの頭にあったのは人々のことであつた。他国を従属させたり、他国の資源を強奪し、その土地の人々の暮らしを奪うことによつてではなく、彼はガンジー主義経済システムによつて完全雇用を確保することを望んでいた。最大限の相互依存を伴う、最大限の自活システムを發展させることによつて、また個人個人と地球社会を貧富や都市と村落、工業化や非工業化などの階層構造によらない水平的な巨大なサークルとして結び付けることによつて、それを実現するのである。しかも一つながりの大洋の中で、内部のうねりが外部の波を生み、その外波が深奥部の波の勢いをそぐことなく、また大波が小波を砕くことなく、どこまでも広がっていくように、分散化された社会では個人が中心軸となり、他のあらゆる物事は個人を中心として回転していくのである。しかし、一人の人間はこのシステム全体を構成する一部分であり、個性をもちながらも全

きない。廃棄物の問題もないだろう。これこそ最も近代的な人間社会の開発理論ではないだろうか。

ガンジーの分散経済の基本的概念は、人間と自然の有機的な関係の回復を目指したものであり、環境破壊と生態系のアンバランスという落とし穴を回避するところにあつた。

そして最後に、ガンジーの自給自足という概念は、自然に帰ろうという古めかしいものではなく、人間と自然、人間と人間の有機的なつながりをつくるうえで不可欠な要素であつた。手仕事をすることによつて、我々は自然に親しむ。土を見、土の香をかき、土に触れるのである。木々やバクテリア、動物、手仕事、その他の自営業についても、同じことが言える。しかしより重要なことは、そのことが我々に共に働くことを求め、さらにそこに連帯感と人類の一員であるという感情が生まれることである。アインシュタインはかつて、もう一度生まれてきたら配管工になりたいと言つた。偉大な人間というのは皆、同じようなことを考えるものなのだろう。

(本論文は、一九九二年、八月十九日インド・デリー市のイン

体から離れた外側の存在にはならないだろう。

技術はこのような個々人のニーズとそれに見合う規模にまでおろさなければならぬ。技術は人々を搾取するのではなく、人々に奉仕する道具にすべきであると、ガンジーは考えた。

ガンジーが思い描いた村は地域共同体を形成する集落であり、これは人口五千から一万人程度のどこにでもあつたような集落だろう。このような共同体の一つが、一つの生産共同体、一つの自立した共同体、一つの奉仕共同体を形成するのである。そこでは地元資源がないものを除いては、必需品のすべてを生産できるだろう。このような共同体は、地元では生産できないものについては地域内、国内、あるいは世界中の他の共同体に依存し、同様に地元生産の余剰分をもつて世界に貢献できる。しかし、まず、基本的必需品を手にいれなければならない。都市については、ガンジーは村の自由を破壊する存在としてではなく、農産物、工業製品、工芸品といった村の生産物を交換する場所として考えていた。

このような秩序の中では、自然の収奪という問題は起

ド国際センターで行なわれた「九二年 日本／インド合同シンポジウム——環境保全と東洋哲学」での原稿を翻訳したものである。

(R・P・ミシュラ・デリー大学ガンジー館館長)

(やまもと しゅういち・創価大学助教授)